

イチゴがつなぐ人々：
久能の観光イチゴ農園の語りと実践から

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学分野 公開日: 2024-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 紗和子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000604

イチゴがつなぐ人々

～久能の観光イチゴ農園の語りと実践から～

山崎紗和子

- 1 はじめに
- 2 歴史ある久能のイチゴ
 - 2.1 石垣いちごの始まり
 - 2.2 イチゴ狩りの始まりと普及までの道のり
- 3 久能でイチゴ狩り農園を営む人々の語りと実践
- 4 考察
- 5 おわりに

1 はじめに

本章では、久能の名物となったイチゴがそれを作る農園の人々にとってどのような存在であるのかを記述し、イチゴを中心としたイチゴ農園の人々の生き方について見ていく。

私は、今回の実習調査にあたり久能を訪れた際、久能におけるイチゴの影響力の大きさを強く感じた。山と海に挟まれているこの地区には、「いちご海岸通り」という名前のイチゴ狩り農園が立ち並ぶ海沿いの通りはもちろん、山には石垣いちごというこの地区特有の石垣栽培で作られているイチゴのビニールハウスとイチゴ狩り農園がある。久能山東照宮のふもとには、イチゴを使ったスイーツ店や生のイチゴを販売する店など、イチゴ狩りにとどまらず、イチゴに関わる店が多く立ち並ぶ。

とはいえ、この地区でイチゴ狩りをしたことがあり、「いちご海岸通り」を通ったことがあったものの、海岸通りにとどまらず地区全体にイチゴ農園があり、イチゴが大きな役割を果たしていることを私は知らなかった。下見で久能を訪れたり、そこに住む人々の話を聞いたりしていくなかで、観光地であると同時に、少子高齢化や利便性の問題など、生活の苦勞を感じていることを知り、生活の不便さや高齢化による農園継続の大変さを抱えながらもイチゴ農園を続け、観光客を喜ばせるイチゴ農園の人々に興味を持った。また、調査を進めるうちに、久能はイチゴにまつわるさまざまな歴史と特徴をもっており、それらが、人々にイチゴ狩りを続けさせる原動力となっているのではないかと考えた。

そこで、本章ではまず、久能のイチゴの歴史と久能のイチゴ栽培が他地域とどのように違

うのかを記述する。次に、実際にイチゴ狩り農園を経営する人々へのインタビュー調査を通して、人々が久能でイチゴ狩り農園を続ける原動力が何なのかを明らかにする。最後に、各農園の共通点から、課題や難しさを抱えながらも久能でイチゴ狩りを続けてきた背景に何があるのかを記述する。ここでは、人間以外の諸要素は絡み合って人間に影響を与えるとするアクターネットワーク理論という考え方をもとに、イチゴを軸とした、モノ、農園の人々、客、観光などの相互作用から考察する。

2 歴史ある久能のイチゴ

本節では、久能のイチゴについて、久能の人々が初めて普及させた石垣いちご、イチゴ狩りの始まりと普及について述べる。

2.1 石垣いちごの始まり

写真 1 はある農園が石垣いちごの栽培に使っている石垣の写真である。このように石垣を用いて栽培する石垣いちごが、久能でどのようにして始まったのかについて述べる。『石垣イチゴの変遷と現状——静岡市久能地区にみる促成栽培』（明治大学農学部農業経済学科農業史研究室編 1984）によれば、石垣いちごの静岡県内への伝来を示すものには確たるものがないが、真実性の高い 3 説があるという。ここでは、そのうち最も信頼性が高いとされる川島常吉説を『石垣イチゴの変遷と現状——静岡市久能地区にみる促成栽培』と『久能』（静岡市立久能小学校創立 100 周年実行委員会編 1992）にもとづいて紹介する。これらによれば、久能におけるイチゴ栽培の始まりは、1900（明治 33）年に久能山東照宮の宮司、松平氏が転任の際に川島常吉氏にイチゴの株を分けたことが始まりとされている。常吉氏が植えたイチゴの株から伸びたツルが石垣を這い上り、石の間に根を下ろした株は、美しい紅色の実をつけた。これをヒントにして川島氏は、その年 1901（明治 34）年に、石垣の間にイチゴの株数十本をさしこんで試験的に栽培してみたところ、期待以上の成果が得られた。こうして石垣でのイチゴ栽培がスタートし、石垣半助氏がこの栽培法を将来有望と考えて、この栽植に努力したという。

以上が川島常吉説であり、久能で広く言い伝えられ、また文献としても残っているため、最も信頼性の高いものとされる。その後、石垣栽培の増加に伴い石垣に使う玉石が足りなくなったため、対策として 1923（大正 12）年にコンクリート板が発明され栽培に使われるようになり、石垣栽培は大きな進展を遂げた。

このコンクリート板による栽培について、A 氏（男性、86 歳、根古屋在住）は、A 氏の父親と親戚の人が農家をやっていた際に、セメントを使用した施工を営む朝鮮人が働きに来て石垣を作っていたと語っていた。石垣に使ったセメントの量で金額が決まったため、セ

メントをたくさん使って硬くすることで朝鮮人は儲けていたそう。A 氏の父親は自分で石垣を作ったために問題なく栽培できたが、朝鮮人に石垣を作ってもらったA氏の親戚は、大量に使用されたセメントが硬いあまりイチゴの芽が出てこず、苦労をしたと言っていた。1941（昭和16）年から1946（昭和21）年は戦争のためイチゴを作れなくなり、その結果、苗もなくなってしまったが、山には自生したイチゴが少しだけ残っていた。A氏は父親に「その苗を取ってこい」と言われ、苗を持ち帰り植えて増やしたことで久能のイチゴ栽培を再開することができたそう。A氏は「そのときに苗があったからイチゴがなくならずに済んだ」と話していた。

このように、久能の石垣いちごには明治以来の歴史があり、当時の人々の工夫や戦争時からの栽培の再開など、多くの苦労を経て今の久能のイチゴ栽培や観光農園があることがわかる。次に、久能の名物であるイチゴ狩りの始まりについて見ていく。



写真1 イチゴを植える前の石垣（2023年5月29日、山崎撮影）

2.2 イチゴ狩りの始まりと普及までの道のり

今では日本の多くの場所でイチゴ狩りは観光の対象として消費されているが、観光客に向けて全国で初めてイチゴ狩りを開催したのは、久能で今もイチゴ狩り農園を営んでいる横山農園だったと言われている。ここでは、この横山農園の現在の経営者である横山しず子さん（女性、74歳、根古屋在住）へのインタビューにもとづき、イチゴ狩りの始まりについて述べる。

事の発端は、1966（昭和41）年に三保園ホテルの支配人である高木さんという人が、「イチゴを観光として使えないか」と久能のイチゴ農家の人々に相談してきたことがイチゴ狩りの始まりと言われている。当時の久能は、イチゴのシーズンが終わると、出荷されずに残ったイチゴは摘んで捨てていたため、これを捨てずに利用できるのなら一見有効な方

法に思える。しかしながら、高木さんが久能のイチゴ農家数軒に声をかけたところ、高木さんのアイディアに反対する人は多かったそうだ。その理由は、イチゴ農家には観光農園としてのノウハウがないため、イチゴを観光として使えないかと言われてもどのようにすればいいかわからなかったからである。そんな折、当時夫が競輪でお金を使ってしまい金銭的余裕がなかった横山農園の妻が「夫は反対しているけれど私で良ければ」と言って協力したことが、久能でイチゴ狩りが始まるきっかけになったと話していた。当時の久能はあまり裕福な地域ではなかったのだが、イチゴ狩りを始めた横山農園が儲かっていることを知った他の農園もイチゴ狩りを始めたとのことだった。

以上が、イチゴ狩りの始まりにまつわるエピソードである。続いて、ここからどのようにしてイチゴ狩りが久能に定着し、盛んになっていったのかを、横山さんへのインタビューと『しずおかいちごのあゆみ』（JA 静岡経済連・静岡県野菜振興協会編 1999）をもとに記述する。

イチゴ狩りのための環境づくりをゼロから行うことになった久能の人々にとって、イチゴ狩りは手探りで行うしかなく、実際に観光農園運営をやりながらどんどんかたちを変えていったそうだ。たとえば、初めはお客さんの人数を制限せず自由に採らせていたが、この方法ではお客さんがイチゴを採りつくしてしまうため、徐々に人数制限を設けるようになったと話していた。また、イチゴの味については、当時のイチゴは酸味が強かったため、湯飲みに砂糖を入れてイチゴにつけて食べられるようにしていたそうだ。その後、高木さんが電車に乗っていたとき、赤ちゃんを抱っこした人が、ミルクを飲ませているのを見て練乳をつけてイチゴを食べるというアイディアを思いついた。そして、横山農園でのイチゴ狩りに練乳を導入した結果、徐々に全国のイチゴ狩り園で練乳を使用するところが増えていったという。

また、練乳の導入に加え、イチゴの品種である「章姫」が生まれたこともイチゴ狩りの普及に貢献したといえる。章姫は、粒が大きくて酸味が少なく、1株にたくさんの実がつくため、久能のイチゴ狩りに使用され、全国でも多く育てられている。章姫を作ったのは久能出身の萩原章弘さんという人で、萩原さんが生前経営していたベリーランドあきひめは、現在も久能でイチゴ狩りとイチゴの販売を行っている。ベリーランドあきひめのホームページによると、萩原さんが久能早生という品種を1983（昭和58）年に作った後、10年かけて品種の開発に成功し、今の章姫が生まれたとのことである。章姫の普及によって美味しいイチゴをたくさん提供できるようになったことも、イチゴ狩りの普及を加速させたといえる。このように、イチゴ狩りを円滑に行うための工夫、イチゴ狩りに適した品種改良などの試行錯誤を経て現在のイチゴ狩りのモデルができあがっていったのである。

さらに、その後の普及の様子は、『しずおかいちごのあゆみ』に書かれていた。これによれば、イチゴ狩りが最も盛んに行われていたのは、東名高速道路が開通した1970年～1980年辺りであり、1970（昭和45）年には、日曜、祝日は交通整理しなければならないほど好評であった。自家用車で来る客が増加したため駐車場が必要となり、1980（昭和55）年初

めに静岡市の補助金で駐車場ができ、各農園も個人的にも駐車場を設置したことにより、年々盛んになり、土曜、日曜日、祭日は慢性的に交通渋滞を起こすほどであった。さらに、最盛期は団体客も多く、イチゴ農園に観光バスが何台も停まっていた。(JA 静岡経済連・静岡県野菜振興協会編 1999：171)。しかし、徐々に団体客が減少し、近年は個人で来るお客さんが多くなったようだ。特に、新型コロナウイルスの流行で団体旅行が途絶え、現在は、多少は以前の状況に戻りつつあるものの団体客は減少し、ロコミを見て個人で来るお客さんが大半とのことだった。

以上見てきたように、久能にはイチゴに関連した全国で初めてのものが多く、古くからの歴史があることがわかる。ここで合わせて考えたいことは、歴史のある久能のイチゴ農園も、高齢化や跡継ぎ不足などの課題を抱え、従事者が減少していることである。『しずおかいちごのあゆみ』によれば、久能を含む静岡市全体のイチゴ生産者数の推移を見ると、1965（昭和 40）年に 560 人だった生産者が年々減り続け、1998（平成 10）年には約半数の 282 人となっている（JA 静岡経済連・静岡県野菜振興協会編 1999：198）。統計資料が存在しないため実際のところは不明ではあるが、そこから 25 年経った現在では、さらに数が減少していることが考えられる。しかし、久能のイチゴ狩りは、農園数は減少しつつも久能の名物として多くの観光客を楽しませている。これには、本節で述べたように、久能がイチゴにまつわる歴史をもつという点で他の地域と異なることが関連していると考えられる。また、章姫は久能で始まった品種であるが、同じ品種であっても農園ごとに味や色、大きさなどはさまざまであり、個々の農園がこだわりを持って作っている。次節では、高齢化などの課題を抱えながらもなぜそういったこだわりを追及できるのか、こだわって作られたイチゴが観光農園を営む人々にどのような影響を及ぼしているのかを、久能でイチゴ狩り農園を営む人のインタビューを通して考える。

3 久能でイチゴ狩り農園を営む人々の語りと実践

前節までは、久能のイチゴの歴史とその特殊性について述べてきた。本節では、久能の名物として多くの観光客が訪れるイチゴ狩り農園を経営している 3 農園 4 名へのインタビューを通して、イチゴをめぐる各農園の実践や思いを記述していく。

〈事例 1 横山農園 横山しず子さん（女性、74 歳、根古屋在住）、新国慎さん（男性、38 歳、根古屋在住）〉

前述の通り、横山農園は久能で初めてイチゴ狩りを実施した農園である。この農園は、現在、横山さんと横山さんの義理の息子にあたる新国さんの 2 人で主に経営している。横山

さん、新国さんともに久能以外の地域から嫁入り、婿入りして横山農園に来た人であり、元イチゴについての知識はなかった。しかし、7年前にイチゴ栽培を主に行っていた夫が病気で亡くなり、自分1人が残され「イチゴを作らなければ」という使命感に駆られ、本格的にイチゴ農家として農業をやり始めたとのことだった。初めは、農家になるつもりはなかった横山さんだが、現在は農業が生きがいになっていると話していた。なかでも、イチゴはこだわろうと思えばいくらでもこだわるができるため、他の野菜を作ろうとは思っていないという。

一方、新国さんは福島県の出身であり、妻と東京に住んで会社勤めをしていたが、昨年からは久能に住んで横山農園で農業をしている。新国さんは、横山農園でイチゴ農家をやることになったきっかけは、妻が、自分の家の農園でイチゴ農家をやりたいと言ったからと話していた。また、「農園がなくなるのが妻は嫌で、久能に戻り農家をやることにしたのではないか」とも話していた。仕事を辞めて農家を継ぐということがとても勇気のいることだと思った私は、新国さんに不安はなかったかと尋ねたが、新国さんは、「イチゴ狩りだからどうとでもなると思っていてそんなに不安はなかった。出荷だけだと大変だが、観光農園だからこそできた」と話していた。また、「おじいちゃんやお母さんがこれまで作ってくれたから、先に作ってくれた人がいるからできる」とも話しており、そこまで不安はなかったようだった。

この農園は第2節2項で述べたようにイチゴ狩りを始めた農園である。現在も規模は縮小したものの、イチゴ狩りが主であり、イチゴの農協出荷や加工品の販売は行っていないようだ。元日に東照宮に参拝に来たお客さんのために、多くのイチゴ農家が出荷するクリスマス用のイチゴを出荷しないほど、イチゴ狩りを重視している。スタッフの役割分担は、手伝いやアルバイトを含め、ビニールハウスへの案内が2人、受付が2人、手入れが1人の4、5人でやっているとのことだ。しかし、この分担は誰でもいいわけではないようだ。横山さんと新国さん曰く、「ハウスに人を連れていくのはできれば家族（筆者註：横山さんか新国さん）がいい。ハウスのイチゴの状態を見てどのお客さんを何人入れるのが良いかは家族の方がよくわかっているから」とのことだ。手伝いやアルバイトを信用していないわけではないが、家族が一番信頼をおけるようだ。また、新国さんは、イチゴを切って詰める作業は横山さんしかできないとも話していた。

〈事例2 まるきん農園 長島さん（男性、67歳、西平松在住）〉

長島さんは、久能とは別の地域でサラリーマンとして働いており、結婚してから久能に来てイチゴ農家を始めたようだ。義父が経営する農園を継ぐためにサラリーマンを辞めてイチゴ農家になった。現在は、妻と自分の娘夫婦と数名のバイトで農園の経営を行っている。他の農園とのつながりを尋ねたところ、久能のイチゴ農園は家族経営で農園を営んでいるところが多く、組合がお客さんと斡旋する形ではないため、つながりというよりも、農園ごとの特色が出ていると話していた。現在は口コミを見て来るお客さんが多いため、イチゴ

の美味しさの評判が来園するお客さんの数につながり、やりがいがあると話していた。お客さんに「おいしかったよ」と言われるのがうれしいと話しており、それがあからこそ、美味しいイチゴを作るために工夫をしているとのことだった。

工夫の具体例を挙げると、イチゴ栽培には、親木からツタを伸ばし、イチゴの株を増やす作業があるのだが、長島さんはこれを静岡市内の高冷地である井川まで行ってやるのだそうだ。わざわざ久能から遠い井川に持っていくのは、朝が寒い井川では、生殖のために必要な花になるための芽を作る花芽分化がしやすく、最初に咲いた花から採れる実（一番果）や2、3期目に咲いた花から採れる実（二、三番果）がとれやすくなるからだそうだ。この山あげという作業を行うことで美味しいイチゴになるそうだが、最近では高冷地まで行ってこの作業をする農家が少なくなっているという。長島さんは車で井川と久能を行き来し世話をするが、義父は泊まり込みでこの作業を行っていたと話していた。また、イチゴは実がつき過ぎると味が薄くなってしまうため、イチゴを間引く適果という作業をするのだが、長島さんは1つの苗につき7個まで間引くと味が最も良いと気づき、必ずその数にしているそうだ。

このように、美味しいイチゴを作るために工夫をしている長島さんだが、イチゴ栽培の苦勞も語ってくれた。他の農園の人も共通して語っていたことだが、苦勞の1つにイチゴの病気があると話す。イチゴは病気になりやすいうえ、農薬が効かないものもあるそうだ。また、農薬が効くものであっても、近年、農薬の健康被害を心配する人が増え、農薬不使用が好まれる傾向にあり農薬を使いにくいとのことである。さらに、1株病気になれば周りのイチゴにも移っている可能性があるため、病気になったイチゴの周りのイチゴは処分するしかないそうだ。そのため、病気になっているかもと思うと朝イチゴを見に行くのも怖いと語っていた。こういった苦勞があってもなお続けられる理由として、イチゴ栽培が好きだからと話し、好きじゃなかったら続かないとも語っていた。元々ものづくりや生き物が好きなことも講じて、農家も好きで続けられているという。

〈事例3 B氏〉

B氏は、久能でイチゴ狩り農園を経営している方で、夫が亡くなってからは自分の子どもたちと一緒に農園経営をしている。この農園では、元々イチゴの販売のみで、イチゴ狩りは販売を始めてしばらく経ってから始めたそうだ。イチゴ狩りを始めたきっかけは、お客さんからの要望だったそうで、「なんでイチゴ狩りをやれる畑とやれない畑があるの?」と聞かれたことと言っていた。別の農園でイチゴ狩りをした後にパック詰めされたイチゴを購入するために自分の農園に寄ってくれるお客さんがいることを知り、わざわざ買いに来てくれるならと思い、少しずつ始めたそうだ。

また、B氏は実家が農家ではないため苦勞も多かったという。そんななかでも農家を続けてこられた理由として、農家をやっているうれしかったことを語ってくれた。B氏のもとには、毎年、常連さんからイチゴがもう始まっているかどうかの問い合わせが来るそうだ。そ

のなかには静岡県外のお客さんもいるという。B氏はこのことに対して、「毎年、よく忘れないでうちに来てくれる」と語っていた。だからこそ、イチゴが成らずがっかりさせてしまうことが怖く、夏場に苗を枯らさないよう細心の注意を払っているようだ。イチゴは病気にかかりやすく、いつ災害でダメになってしまうかもわからないため、毎年無事にイチゴができるとホッとすると話していた。実際に、年末に1度突風でビニールハウスの1部が飛んでいってしまったことがあったそうだ。サイズが合っていない予備のビニールをかけるなどの対応をしてなんとか乗り越えたそうだが、B氏はそこからの1週間を「魔の1週間だった」と話しており、当時の焦りが伝わってきた。

また、B氏は、今後も農園を続けていけるよう、少しずつ設備を整えているという話も教えてくれた。子どもたちが苦勞をしないよう、あと30年は使えるように毎年1か所ずつくらい設備を直しているそうだ。子どもが高校を卒業してからアルバイト代わりに手伝ってもらっていたものが、そのまま今のようにB氏と子どもたちで経営するかたちになったという。「子どもたちが農家をやらなかったら自分は辞めていたと思う」と話していた。

以上が、久能でイチゴ狩り農園を営む人々の事例である。次節では、これらの農園に共通している点から、彼らの営みについてイチゴを中心において考察する。

4 考察

すべての事例に共通しているのは、まず、元々久能に住んでいなかった人が結婚をし、久能に嫁いできてからイチゴ農園を始めた点である。私は、農家の後継ぎというと元々その家で生まれた人で、その人が病気等により継げなくなった場合は、子どもが継ぐか継がなければ途絶えてしまうものと考えていた。しかし、3つの農園はすべて久能の外から嫁あるいは婿に来た人によって経営されている。初めは、夫が亡くなったから、自分以外にできる人がいなかったからという理由であっても、その後廃業することなく、現在もイチゴを作り多くの観光客を楽しませている。

次に、イチゴ狩りという観光農園特有の客との顔の見える関係が、イチゴ農家を続ける原動力になっている点である。長島さんの語りにあったように、久能のイチゴ農園は家族経営が多く、口コミによって客個人が自由に農園を選ぶ。そのため、バック詰めされたイチゴを購入する場合に比べ、イチゴ狩りの場合は農園名で覚えられやすく、「〇〇農園のイチゴが美味しかった」と広まりやすい。また、イチゴを食べた客とイチゴを作る生産者が顔を合わせるため、客が直接「おいしかったよ」ということができる。4名ともそこにやりがいを感じるからこそ、栽培の工夫や長く続けるための取り組みができていていると考える。

さらに、イチゴという果実自体の特性によって、イチゴへのこだわりが生じている点も共

通している。具体的には、病気や災害の影響を受けやすいことと、育て方によって甘さや形などの質が大きく変化することだ。イチゴの病気や災害の影響は、長島さんやB氏に加え、イチゴ農家の人々は皆イチゴ栽培の苦勞として挙げていた。他の作物でも災害や病気はあるが、イチゴは特にそれらの影響が大きく、1株病気になれば周りのイチゴにも伝染するため、病気の株とその周りの株をすべて処分しなければならない。処分することになれば、その年のイチゴ狩りができなくなり、毎年、各農園のイチゴを楽しみにしているお客さんを悲しませてしまう。そのプレッシャーから、各農園は病気にかからず美味しいイチゴを育てるためにそれぞれがこだわりを持ってイチゴを作る。繊細で手がかかるイチゴだからこそ、育て方によって全く結果が異なるため、自分なりの育て方でできたイチゴでお客さんが喜んで帰っていくのを見られることが、4名のイチゴへのこだわりにつながっていると考えられる。

このように、4名が現在イチゴ狩り農園を続けている背景には家族、観光農園という経営形態、客、イチゴ自体の特性というように多くの要素が絡み合っている。私は、これをフランスの人類学者ブルーノ・ラトゥールが提唱した「アクターネットワーク理論」をもとに考察したい。ラトゥールの理論を解説した久保明教によれば、アクターネットワーク理論において、事物がもつ意味は、非人間を含む種々のアクター（行為者）が織り成すネットワークの効果として産出される。各アクターの形態や性質は他のアクターとの関係として生み出されネットワークが築かれていくが、それが安定し一定の持続性をもつようになると、特定のアクターが他のアクターが行動する際の必須の通過点になるのだという（久保2019：64-65,143-144）。

この、非人間も含むさまざまなアクターによって事物への意味付けが変化すること、そして特定のアクターが他のアクターが行動する際の必須の通過点になるという点は、久能のイチゴ農園にも生じていることだと私は考える。初めは、イチゴとは全く縁のなかった人々が、久能という地域の特性、結婚、跡を継がなければという使命感というようにいくつかの要素が重なり、予想外のかたちでイチゴに関わるようになった。ここにはもちろん本人の意志も存在するが、横山農園やB氏のように、夫が亡くなりやらざるを得ない状況に置かれた場合もある。しかし、イチゴに関わってから、やらざるを得ないからという理由以外に、イチゴ狩り特有の生産者と消費者の顔の見える関係性から生じるやりがいや生まれ、イチゴ狩り農園をやることの意味がそこに生じるようになる。また、イチゴ自身の特徴にも着目したい。イチゴの繊細さや、育て方によって変化する甘味や色、形などの特徴から栽培のこだわりが生じ、各農園のイチゴに特徴が生まれる。そこに、観光の個人化による口コミでの広がりや、久能のイチゴというブランドが合わさることで客が集まり、集まった客が、こだわりのイチゴに対する感想を農園に直接伝えることで、次の年もイチゴを作る原動力となり農園が続いていく。さらに、土地が狭いという久能の特徴から、斜面で栽培し広い面積を必要としない石垣いちごを作るようになったために、石垣いちごという独自性が生まれ、その独自性を求める客がイチゴ狩りの場所として久能を選ぶこともあるだろう。つまり、久能の土地の特徴、石垣栽培という栽培方法も、アクターとしてイチゴ農園の人々に影響を与え

ている。このように、家族、客、イチゴ自身の特徴、久能の土地、石垣栽培といった、イチゴを中心としたさまざまな要素が組み合わさり、農園の人々も予想していなかった結果に導かれ、イチゴ農園としての営みが行われている。

さらに、私はこの関係性が他の作物では成り立たず、イチゴだからこそ生じている関係性であることにも注目したい。もし、これがイチゴではなく他の作物であったらどうだろうか。イチゴの果物狩りに向いた形状や人気の高さ、久能発祥のものが多という特殊性がなければ、観光農園ではなかったり、栽培へのこだわりが生じにくくなったりするだろう。新国さんの「観光農園だからこそできた」という語りや長島さんやB氏が話していた、苦労はあるが、お客さんをはっきりさせたくない、美味しいと言ってもらえるから続けられるということをおまえると、他の作物の農家であった場合、そもそも始めようと思えなかったり、続けていかなかったりする可能性がある。つまり、イチゴというモノの性質があってこそその農園であり、イチゴを軸に行動が選択されているということが出来る。そして、このことから、久保が述べた特定のアクターがイチゴであると考えられる。人とイチゴ以外にも先に述べたようにさまざまな要素がアクターとなってイチゴという通過点を通り、農園の人々と相互作用することによって農園のこれまでと現在の営みがあるといえるのではないだろうか。

5 おわりに

本章では、イチゴ狩り農園の営みを見ながら、イチゴを中心としたさまざまな要素の相互作用から農園の歴史と現在があると考察した。ただし、久能のイチゴ狩り農園すべてが、苦労を抱えながらも続けていけるわけではない。イチゴへのこだわりや客との顔の見える関係があっても、跡継ぎがないことや相次ぐ自然災害など、イチゴ狩り農園を続けていく上での弊害は多い。今回お話しを聞いた人のなかには、自分の代でイチゴ農家は終わりにしようと思う、続けたいが子どもに大変な思いはさせられないという人もいた。

私はこのような話を聞き、初めは「跡継ぎがないという課題だ」と決めつけてしまっていたが、調査を通してそれだけではないと思うようになった。久能がイチゴの長い歴史を持っていても、そのイチゴがどんな存在になるかは人によって異なり、続けないことも、イチゴを軸とした1つの選択だと思うからである。

この気づきを通して、同じ地域のイチゴ農家といえども、イチゴへの思い、抱える課題など農園の数だけ違いがあり、観光客としては感じることのできない1人の人としての農園の人を知ることができた。

謝辞

今回の調査にあたり、多くの方にご協力いただきました。朝早くから農作業があるにもかかわらず午前中のインタビューに応じてくださったり、他の農園をご紹介してくださったりと貴重なお時間を割いてくださり心から感謝申し上げます。また、本報告書に載せきれなかったインタビューにつきましても、とても調査の糧となりました。本当にありがとうございました。

参考文献

久保明教

2019『ブルーノ・ラトゥールの取説——アクターネットワーク論から存在様態探求へ』
月曜社。

静岡市立久能小学校創立 100 周年実行委員会編

1992『久能』静岡市立久能小学校創立 100 周年実行委員会。

JA 静岡経済連・静岡県野菜振興協会編

1999『しずおかいちごのあゆみ 1999』JA 静岡経済連。

ベリーランドあきひめホームページ

「ベリーランドあきひめ」(2023 年 7 月 17 日閲覧 <http://www.tmyume.net/ichiba/hagiwa.html>)。

明治大学農学部農業経済学科農業史研究室編

1984『石垣イチゴの変遷と現状——静岡市久能地区にみる促成栽培』明治大学農学部農業経済学科農業史研究室。